

水川繁雄氏インタビュー

8mmムービーは個人の時間を再現するための
タイムカプセルなんです。

昨年10月17日のユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベントで講演を行った、水川繁雄氏(元富士写真光機 工業デザイン担当)のインタビューをお届けする。水川氏は、1965年にシングル8用カメラの最初の製品「フジカシングル8 P1」をデザインして以降、1979年の生産終了まで多くのシングル8用カメラを設計し、その変遷に立ち会ってきた。日本のアマチュア小型映画史の重要な1ページとしてお読みいただければ幸いです。

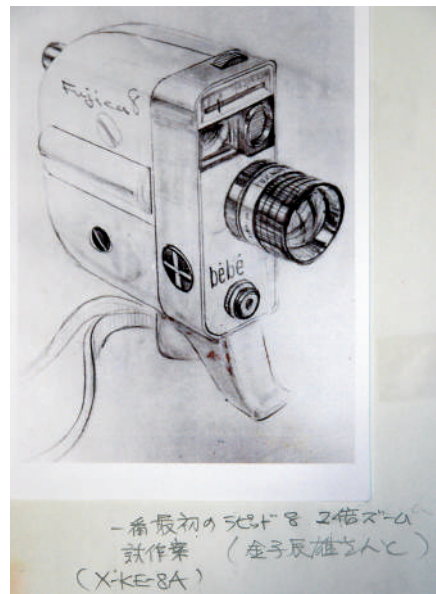
P1開発まで

—お生まれはどちらですか。

1937(昭和12)年、奈良に生まれて岡山で育ちました。兄二人と姉が一人いるのですが、ずっと年が離れていましてね。ある時、東京へ出ていた下の兄が豆カメラ(超小型カメラ)を買ってきてくれたんです。それからカメラで遊ぶようになりました。その後上京して武蔵野美術短大でデザインを学び、1961(昭和36)年に富士写真フィルムの子会社である富士写真光機に入社して、工業デザインを担当しました。すぐに当時開発されていた8mmフィルム「フジカシングル8」に対応したカメラのデザインの担当になったんです。

当時は8mm映画と言えばダブル8ですが、フィルム装填や操作が複雑で、凝った趣味の人が楽しさを楽しんでいるような機械でした。そこで甲南カメラ研究所(現在は株式会社コーナン・メディカル)の所長・西村雅貫さんが、家庭のお母さんが赤ちゃんを簡単に撮れるものを作るべきだと提案して来られたんです。ダブル8のようなややこしいフィルム装填ではなく、マガジンをポンと入れてレンズを向ければそのまま写るものをやるべきだと。それに富士フィルムが乗った。

最初はシングル8ではなく「ラピッド8」と呼んでいました。というのは、最初はアグファと組んでいたからです。当時アグファは、ムービーではなくスティルのカメラですが、コダックが出した簡易装填型のインスタマチックカメラに対抗して、35mmの「ラピッドカセット」を作っていました。富士は8mmフィルムのマガジンを開発する時に、コダックにも働きかけたのですが、返事がなかった。それでアグファと組んでラピッドのムービー版と一緒にやらなにかという働きかけをしたわけね。これは相当進んだんですが、いろいろあって結局アグファの8mmはコダック陣営に下ってしまい、ラピッド8という名前は使われませんでした。後



▲図1: bébéと名づけられた最初期のスケッチ

でお話しますが、P1カメラのカウンターの所にある「赤ポチ」はその時の名残りです。

それで私が最初に考案したのがこれです(図1)。—当初はズームがあったんですね。

2xズーム。最初1年以内にちゃんと動く試作品を至急作れということで始まりました。

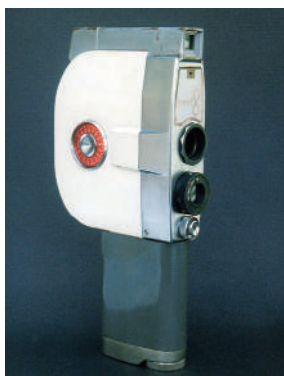
—形はダブル8カメラに近いですね。

そうそう、シングル8らしさはまだ無いね。試作を急ぐため、従来のダブル8カメラのようにフィルムの横にモーター、駆動系、電池と積み上げると当然厚みが出てゴロンとしますね。僕はマガジンの薄さを生かしたデザインにしたいと思っていたので次に作ったのがこの石膏モデル(図2)。石膏をコリコリ削りましてね。ボディは薄かったんだけど、ファインダー部分が出っ張っちゃった。この時春日八郎の「お富さん」という歌が流行ってましてね。—「死んだはずだよ、お富さん」

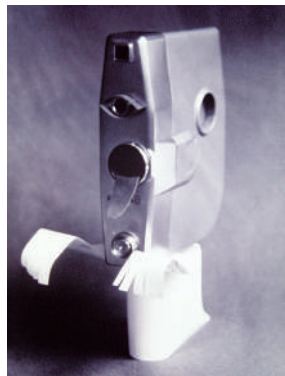
そう(笑)。それで粋な横櫛のお富さんにちなんで「横櫛」というあだ名が付きまして。その次は「ちょんまげ」(図3)。

—かわいいですね。

僕のデザインの考えとしては、マガジンが薄くて小さいんだからカメラも薄くて小さいんだ、と思わせるためにボディとファインダーとグリップをくっきり分けてね。グリップが手の中へ入っちゃうと非常にコンパクトでしょう？ というのを狙ったわけです。さらにもっとスマートにしてみようぜということで、この試作機を作りました



▲P1カメラのデザインの変遷。左から図2:「横櫛」 図3:「ちょんまげ」 図4:量産試作機



▲図6: P1カメラのカウンター部(10と15の位置に「赤ポチ」がある)



▲図5

図7: C100▶

(図4)。シングル8の薄さを生かして、ボディを
とことん薄くしているんですよ。このちょこっと
左右に出っ張っているのは、丸いシャッターの
羽根がボディからはみ出しているんです。

ファインダーは高価な実像ファインダー。7、
8倍コストがかかっているはず。徹底的に
コンパクトにして、でも倍率は上げている。絞
り数値の文字や黒いフレームもキリッと見えて
いるでしょ。P1タイプのデザインは、基本的
にこのまま十何年も売れ続けました。

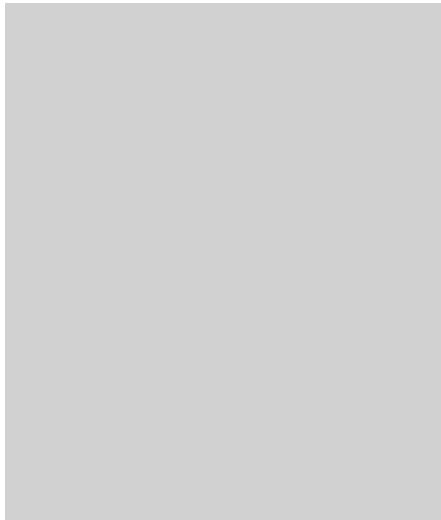
——画期的なものは長持ちするのですね。

ところが1964年にコダックが急にスーパー
8を出してきたんで、こちらは泡食っちゃった
わけね。画面サイズがダブル8よりバンと大き
くなっているから、こちらがいくら「マガジンポ
ン」と言ったって、従来の画面サイズのままだ
と画質で即、差がついちゃう。既に何千台か
はダイカスト製造など生産準備が進んでいた
んだけど、止まってしまいました。それはもう、
上を下への大騒ぎですよ。半年以上ジリジリ
と塩漬けにされている状態が続いたもんだか
ら、こうやって「恨めしいお化け」(図5)を作
ってイタズラしました(笑)。

結局富士フィルムは方針転換して、マガジ
ンはそのままで画面サイズはスーパー 8
にそろえ、「シングル8」と名づけることになり
ました。ただし鑄造したダイカストの部品は生
かしたままやると。

——工場は足柄ですか、大宮ですか？

大宮です。足柄はフィルムだけ。半年の塩
漬けが終わった途端、たいへんなことになり
ました。画面サイズが大きくなったから、フィ
ルムの長さが1.3倍くらい必要なわけね。それ
でフィルムをポリエステル(PET)ベースにし
て薄くして、マガジンに50フィート(15m)を
入れることができました。



▲カメラデザインの構想を練る水川氏

——PETベースのフィルムには、すぐシフトでき
たのですか？

富士フィルムはできたんです。ところがア
グファはその技術が無いので、従来のトリア
セテート(TAC)ベース。そうすると厚いわけね。
——コダックと同じですね。

そう。そうするとこのシングル8のマガジン
にすると10mしか入らない。それでカウンター
の10mのところにアグファ用エンドマークの赤
ポチ(図6)を付けたわけ。アグファはここで
おしまいよって(笑)。

で、扇千景さんがコマーシャルやってくれて、
P1が売れ出したわけです。定価は16,500円。
ダブル8に比べるとだいぶ安い。

数々のアイデア

最初の機能試作機のデザインをしていた当
初、これでズームがなかったらコンパクトな
カメラができるよなあ、と、スケッチを描いて
いました。それがのちに、大阪万博に合わせて
発売したC100(1970年発売、図7)へとつな
がります。デザインの発想っていうのは同時
にいろんなことを考えるものなんだよね。次の
ものを考える時に、前に寝かせていたアイデ
アが生きてきたりするんです。

P1は回転方向の転換用にベベルギヤ(かさ
歯車)が入っているけど、あれが非常にコスト
が高いんです。安くするためにはスパギヤ
(平歯車)だけでまとめた。モーターと電池
を並べて、グリップはつけない。そうすると
やっぱりゴロンとなっちゃうから薄さはなくな
り、その代わり高さが低くなる。だから横に
ベルトを付ければ、ちょうど手の中に入っちゃ
うでしょっていうのを提案したわけ。

——サイドベルトは画期的ですね。当時こうい
う形のカメラは無かったですよ。

ない。でも今のビデオカメラはみなこれだ
ぜ。これがサイドベルトのオリジナルね。パテ
ント取っとけば良かった。コダックのスーパー
8のカメラなんかをいろいろいじっている時に
ひらめいてしまったわけ。手の中に入るんだっ
たら、人差し指がかかるところにシャッター
ボタンが来ればいいし、そのままと取り落
とすから横にベルトが付くといいなあという
考え方で、わりとロジカルに発想しています。

——ZC 1000(1975年発売)の開発にはすごく
時間がかかったと思うのですが。

そうなんです。ボディのデザインアイデア
がなかなか思いつかなくてね。でも思いつい
てからは早かったよ。ZC1000は最高級機で

操作箇所が多い。けれども基本的な操作は間
違えないようにしようと思って「グリーンマッ
チ・システム」というのを考えた。各操作部の
基本部分、例えばシャッター速度18、開角調
整0のところとか全部緑色の表示にセットして
おけば標準撮影に使えるようにしました。標
準撮影は間違えないで撮れるように、フル
プルーフ(誤操作しても危険が生じない仕組
み)しておかなきゃ駄目なんだよね。

——P2ズーム(1979年発売)のスナッフフォー
カス機能もすごいですよね。

僕のアイデア。

——ズームとフォーカスが連動します。

ズームレンズは望遠と広角では焦点深度の
範囲が違う。そこでフォーカスリングとズーム
リングをズームレバーで関連づけて、なるべく
いつでも深くピントを合わせてやりたいよ、と
いうのがアイデアの元ですね。これでオートフ
ォーカス(AF)とまではいかないけれども、ピント
合わせに気を使わないでまるで固定焦点と同じ
ように気楽に撮れるでしょうというアイデアです。

この頃は既にサウンドカメラの時代に入っ
て、カメラ自体がかなり大型化していました。
でも本来家庭用なのだから、もっとコンパクト
でありたいなと思ってP2を提案したわけね。カ
メラは小さい方が良い。カメラというのは「撮
っている時間よりも持ち歩いている時間の方が長
いんだぜ」と。

——カメラの変遷を見ていくと、技術がすごい
ですね。

シングル8はトータルシステムですからね。
試作品だって今でも使えます。8mmカメラは
も保つはずなんです。トータル寿命は何百時間
なんですよ。何百時間と言ったら、たったそ
れだけ？と思うかもしれないけど、3分半の
フィルムを何本撮れると思う(笑)？

——経年劣化さえなければ大丈夫なはずす
よね。

8mmって何？と言う人もいたけれど、8mm
ムービーは個人の時間を再現するためのタイ
ムカプセルなんです。スティルの写真を何百
枚積み上げたって、時間は戻って来ない。た
とえ数秒でも動く映像から思い出せるものは
ものすごく強烈なんだ。だから、8mm撮りま
しょうよと言ってました。

——本日は貴重なお話をありがとうございました。



2015年7月14日、水川氏宅にて/聞き手・構成:村木
恵里、石川亮(共にフィルムセンター技術職員)、
構成:大澤浄(フィルムセンター研究員)